

1 赤羽末吉の線（一本の線もおろそかにしない絵本作り）

「赤羽さんの真直ぐでない線は、対象を正確に見または正確にイメージとしてとらえた上で、それを赤羽さんのお人柄の中で一度ゆっくりとふくらました、とでもいうべき的確さにおいて豊かである」（木下順二『月刊絵本一特集 赤羽末吉の絵本』昭和51年1月号 すばる書房）

2 赤羽末吉ならではの江戸っ子のユーモアを感じさせる絵本

『ゆかいなきっちょむさん』文 藤田圭雄 1963年 至光社

『えすがたにようぼう』文 今江祥智 1965年 盛光社

『へっこきじっさま一代記』文 大川悦生 1971年 偕成社(さし絵)

『へそとりごろべえ』文 赤羽末吉 1978年(2017年、改訂新版) 童心社

『へそもち』文 渡辺茂男 1980年 福音館書店

『てんぐだいこ』文 神沢利子 1982年 偕成社 など

2-1 赤羽末吉のユーモア

幼少期から青年期にかけて、落語や芝居、映画によって培われたセンス、客観的で鋭い観察眼、風刺の精神、対象に対する深い愛情、

2-2 幼い頃に接するものの大切さ

幼い頃の体験が、自分を絵本画家へと向かわせたことを強く自覚していた赤羽は、子どもへ手渡す絵本は質の高いものでなければならないと考えていた。

「私は満州から引き揚げて、都営住宅のささやかな庭に、花をいっぱい咲かせてその中で子どもを遊ばせた。子どもは花を意識せず、めでもしない。しかし、美しい花々はかならず子どもの心に作用していると思う。子どものだじな環境をつくっている絵本はこの花々でなければいけない。」（『私の絵本論』「八方やぶれの展開」2005 平凡社 p88）

3 中国、モンゴルを題材にした絵本

『スーホのしろいうま』こどものとも 67号 再話 大塚勇三 1961年(復刻・2012年) 福音館書店

『ほしになったりゅうのきば』再話 君島久子 1963年 福音館書店

『白いりゅう黒いりゅう』編 賈芝 孫劍冰 訳 君島久子 1964年 岩波書店(さし絵)

『柳のわたとぶ国』文 赤木由子 1965年 理論社(さし絵)

『聊斎志異』編 奥野新太郎 訳 藤田佑賢 1967年 盛光社(さし絵)

『スーホの白い馬』改訂版 再話 大塚勇三 1967年 福音館書店

『チワンのにしき』文 君島久子 1969年 岩波書店

『ほろびた国の旅』文 三木卓 1969年 盛光社(さし絵)

『王さまと九人のきょうだい』文 君島久子 1969年 岩波書店

『いしになったかりゅうど』再話 大塚勇三 1970年 福音館書店

『ほしになったりゅうのきば』改訂版 再話 君島久子 1976年 福音館書店

『あかりの花』探話 肖甘牛 再話 君島久子 1985年 福音館書店

3-1 赤羽末吉の中国

- ・旧満州(現中国東北部)での15年間の暮らし、その大陸の広大な大地と中国の文化は日本画家赤羽末吉を生み、育んだ。
- ・中国ですでに、子ども向けの絵本や挿し絵を幾つか書いている。
- ・国家の政策「五族協和」を信じ、旧満州で一生暮らそうと考えていた。中国各地を旅しスケッチや文章を残すが、それらの資料には、赤羽末吉の中国の風土、文化、そこに暮らす人々への愛情が溢れている。満蒙開拓団の村で見た日本の雪国のモンペ姿が、デビュー作『かさじぞう』を、モンゴルへの旅が『スーホの白い馬』を生み出すことになる。
- ・影絵芝居や郷土玩具などの中国の自然、文化への深い理解は、絵本にも生かされている

3-2 命がけの資料持ち出し

戦後、中国から日本へ引き揚げる際、写真、絵、印刷物などの持ち出しは固く禁じられ、乳飲み子を含む家族7人に行き先2個と荷物量も制限されていた。そのような中、いつか大作を描く資料にしようと、生活の糧にはなりえない、沢山の写真やスケッチなどを隠し持ち帰ったところに、赤羽末吉の中国への思いと、絵に対する真摯で、誠実な姿勢が読み取れる。

4 「かさじぞう」について

- ・日本の、湿度の多い、しっとりとした自然は、まるで墨絵の様だと考え、ほとんど墨一色の絵本を作ったことは画期的だったが、当時の評価は必ずしも高かったわけではない。
- ・七年間、日本の豪雪地帯を旅し、雪を観察し続けた赤羽は、この物語の雪は、ぽつりと水分を含んだ雪でなければならないと考え、会津地方、柳津あたりの雪を描いたという。
- ・省略の利いた、かつ文学性豊かな瀬田貞二の文章に呼応して、赤羽末吉の絵もまた、詩情をふくらませ、雄弁に物語るものとなっている。

4-1 雪が描かれている絵本

『かさじぞう』こどものとも 58号 再話 瀬田貞二 1961年 (1966年単行本として刊行)
福音館書店

『水仙月の四日』文 宮沢賢治 1969年 福音館書店 (1997年 創風社より改訂版刊行)

『つるようぼう』再話 矢川澄子 1979年 福音館書店

『ゆきむすめ』文 今江祥智 1981年 偕成社

『ひかり素足』文 宮沢賢治 1990年 偕成社

『わらべうた』「雪ふりのうた」1997 偕成社

4-2 雪国通いの生み出したもの

- ・『水仙月の四日』の中の木々、『ひかりの素足』の真珠のような光を持つ雪、『ゆきむすめ』の全編を包む雪の下に埋もれる氷の色など、雪国通いの体験が随所に生かされ、物語を豊かなものにしていく。『わらべうた』の中の「雪ふりのうた」の雪、藁沓、藁沓が踏んでいる雪の触感なども秀逸で 2013年にミュンヘン国際子ども図書館より出されたカレンダーにも使用されている。

- ・赤羽は、景色だけでなく、雪国の生活、人々の心情などを長い年月のうちに感得していっ

た。その経験は、民話、昔話絵本を描く大きな力となっていた。

5 赤羽末吉の民話、昔話絵本

『だいくとおにろく』こどものとも 75号 再話 松居直 1962年 福音館書店 (1967年
単行本として刊行)

『こぶじいさま』こどものとも 94号 再話 松居直 1964年 福音館書店 (1980年 単
行本として刊行)

『ももたろう』再話 松居直 1965年 福音館書店

『くわずにょうぼう』こどものとも 252号 再話 稲田和子 1977年 福音館書店

『そばがらじさまとまめじさま』こどものとも 295号 再話 小林輝子 1980年 (2008年 単

『したきりすずめ』再話 石井桃子 1982年 福音館書店 行本として刊行)

『ねずみのすもう』文 神沢利子 1983年 偕成社

『にぎりめしごろごろ』こどものとも 334号 再話 小林輝子 1984年 福音館書店 (1994

『けちんぼおおかみ』文 神沢利子 1987年 偕成社 年単行本として刊行)

『かちかちやま』再話 おざわとしお 1988年 福音館書店

『うまかたやまんば』再話 おざわとしお 1988年 福音館書店

『みるなのくら』再話 おざわとしお 1989年 福音館書店

『日本の昔話』1～5巻 再話 小澤俊夫 1995年 福音館書店 (さし絵)

5-1 赤羽末吉の民話、昔話

- ・残酷な場面もごまかさず、きちっと描くが、グロテスクにならないように工夫をこらす
- ・鬼や妖怪、幽霊なども、たとえユーモラスなものでも、そこに怖さを秘めていなければならない
- ・物語の本質を理解し、それに合わせて、筆、紙などを変え、描き方を工夫する。

5-2 子供の感じとる力を信じて描く

・「スーホは、白馬をととても大切に思ってそっと抱いているのだね」と、スーホの指先まで読み取ってくれた幼稚園児の言葉に、赤羽は子どもの持っている力を感じた。

5-3 目指したのは樹下美人図、「深く、高く、強く、優しく」

「子どもの絵というものは極めて大衆的なものだと思う。然し大衆的だからと言って卑俗であってはならない。絵かきは高邁なる精神で絵をかかねばならない。とくに子どもの絵かきはそのことが大事だと思う。」(『私の絵本論』「八方やぶれの展開」2005年 平凡社 p 82)

・子どもだましの絵を描くのではなく、物語の舞台となる地方への取材旅行や膨大な資料の読み込みを通じて、風俗、道具など、細部にわたっての考証を欠かさなかった。

6 赤羽末吉の創作絵本

『おおきなおおきなおいも』原案 市村久子 1972年 福音館書店

『へそとりごろべえ』1978年 (2017年 改訂新版) 童心社

『鬼のうで』1976年 偕成社

『そらにげろ』1978年 偕成社

『おへそがえる・ごん・ぽんこつやまのぼんたとこんたの巻』1986年（2001年、小学館より
改訂版刊行）

『同・おにのさんぞくやっつけろの巻』1986年

『同・こしぬけとのさまの巻』1986年（以上3巻共、2013年、福音館書店より復刻版刊行）

6-1 赤羽末吉の遺言―「おへそがえる・ごん」シリーズ

制作ノートからは、赤羽の人生最後のこの創作絵本が、その手法において、絵本づくりの集大成であることが読み取れる。そして、そこには、赤羽末吉が愛してやまない中国の記憶と、日本の自然が盛り込まれている。さりげなく描き込まれた、平等観や、戦争中の自分の体験、権力への風刺、それらは、赤羽末吉が歩んできた人生そのものだともいえるだろう。赤羽は、自らの人生を、楽しさに包んで、丸ごと子供たちに贈った。まさに、この『おへそがえる・ごん』三部作は、戦争責任を自ら背負い、平和を願い続けた赤羽末吉の遺言と言っても過言ではない。さらに、痛快で屈託なく描かれたこの長編物語は、子ども大人を問わず、読者を心から楽しませてくれる。それは、絵本を描くうえで、赤羽が一番に目指したことだった。

7 赤羽末吉の絵本

赤羽末吉は、子どもたちに伝えたかったメッセージを、絵本の中でことさらに語ることはなかった。しかし、そこに秘められた思いは、絵本の楽しさを通して、赤羽末吉が絵本の中に描いた花のように、子どもたちの心にしっかりと作用を及ぼし、子どもたちの心を大きく、豊かにのびやかに育ててくれる。

赤羽は、絵本を描くことが何よりも好きで、絵本の中で子どもたちと語らうことを存分に楽しんでいた。だからこそ、子どもたちが心から楽しめる絵本を描くことができたに違いない。

8 心に宇宙の広がり

「子どもは、絵本でもって人生体験をやるんです」（赤羽末吉、「絵本づくり―私の姿勢」

『子どもの本棚』通巻124号 日本子どもの本研究会 1980年）

自分の描いた絵本の中で、子どもたちは多くのことを体験し、心豊かに育って欲しい。そして、若き日、自身が大陸の地で感じとった悠久、そのような心の宇宙の広がりをも子どもたちにも感じてほしいと願っていた。

赤羽茂乃記